

なぜ「感性教育」は学生に 深い自己理解をもたらすのか

小 林 隆 児

Why Does “Brushing-up Sensibility Education” Give
Students Personal Insight?

Ryuji Kobayashi

従来の「個をみる」臨床と「関係をみる」臨床との違いを強く認識するようになるにつれ、私は感性の働き、つまりは「感じ取る」ことの重要性をとみに考えるようになった。「感性教育」を試みるようになったのはそのような動機からであった。本稿は、主に臨床家（社会福祉士、精神保健福祉士、臨床心理士など）を目指す学生（学部生、大学院生）を対象に実施したこの試みを通して、学生たちはどのような体験をしたか、その体験談をもとに、感性教育の持つ意義と可能性について論じたものである。

I はじめに

本日のテーマである「感性」に私が強く関心を持ち始め、その重要性を認識するようになったのは、すでに二十数年前のことになりますが、1994（平成6）年に母子ユニット（以下MIU）での臨床を開始してからです。私自身がそれまでの患者に焦点を当てた「個をみる」一般の精神科（心理）臨床から、母子臨床という「関係をみる」臨床へと舵を切ってからです。しかし、正直に申しますと、当時から「関係」の重要性を力説していましたが、その重要性を明確に認識するようになったのは、不思議なことに、14年間のMIUでの臨床研究活動を終えて、通常の臨床の場に戻ってからでした。「親が死んで初めてその

ありがたさを知った」体験でした。

それを一言で言えば、母子関係で観察してきた事象を、日頃の面接での〈患者-治療者〉関係においても同じように観察することを頻繁に経験するようになったことです。この発見は私にとって大きな驚きでもあり、喜びでもあったのですが、そこで「個をみる」と「関係をみる」ことは本質的に異なるということを明確に認識することができたように思います。

このような経験とともに、私も歳を重ねるにつれ、次第に教育の重要性を考えるようになっていきました。とりわけよりよい臨床家を育てるという臨床教育を考えた時、私には現状を見るにつけ、もどかしい思いが強くなっていきました。

私は座学中心の臨床教育を経験する前に、20歳になった時から自閉症療育ボランティア活動に参加していました。当時臨床家としての知識はほとんど皆無に近かった私ですが、子どもたちと直に触れ合いながら肌で感じ取った経験とそこで生まれた関心や問題意識が、その後の私自身の研究の方向性を決定づけていることを、今振り返ってみると強く実感するのです。

近著『自閉症スペクトラムの症状を「関係」から読み解く』（ミネルヴァ書房）を書き上げる際に、これまでに纏めた仕事を全て振り返って洗い直す作業をしたのですが、私が事例研究として初めて報告した論文¹を読み返した時に気づいたのは、患者との面接で私が着目した点は、現在の私が関係病理として捉えた「あまのじゃく」そのものを示していることでした。具体的には次のような面接場面の一コマです。面接医は私の恩師村田豊久先生（当時福岡大学助教授）で、私は陪席していました。

当時12歳7ヶ月の男児で、幼少の頃から地元では天才少年との誉れが高く、中学の時、九州から関西の有名私立進学校に入学しました。しかし、入学してまもなく授業中に一人校庭に出てうろつくという不適応行動を示すようになったため、急遽地元に戻って、当時私が研修医として勤務していた大学病院精神

¹ 小林隆児（1979）. 進学コースから脱落したある秀才児の軌跡. 九州神経精神医学, 25, 236-241.

科を受診することになりました。以下、その論文の一部を引用します。

外来初診時の状態：落ち着きが無く全くふざけたような対応であった。問いかけても返事をまともにはせず、傍にあった血圧計をいじりはじめ、マンシエットを力一杯ふくらませて今にも破裂寸前までにしたり、すぐ部屋から出てゆこうとする。医師が眼を診察しようとするのでさらに眼を閉じようとする。聴診器を当てようとするので膜のところをわざと口をもってゆき大声で叫ぶなど、悪ふざけと思える行動の連続であった。問診の一幕を再現すると次のようなひねくれた対応が特徴的であった。

N 中学校にはK 市から何人行った？

《一人と一匹》

今日は何に乗って来た？

《何でもいいだろう》

新幹線？

《乗る権利あるだろ》

(ふざけていることを指摘すると)

《俺がふざけたらいかんというんか》

と悪態をつき、持っていた本を読んでいる振りをしてそのなかに逃避しようとしているが、他方では《入院させるんですか。はっきり言って下さい。》と、こちらに挑発的で、相手をかなり意識し、おびやかされるのをおそれている様子もうかがわれた。

ここに見られる男児の対人的態度は「あまのじゃく」そのものであることがわかります。当時から私の着目するところは今とつながっているのだと改めて思い知らされました。

当時の自分を振り返って思うのですが、若い頃の経験はとても大切なことですが、それとともにもっと大切なことは、当事者自身がいかなるところに関心を持ち、いかなるところに着目するか、その経験の質だということです。そこで改めて痛感するのは、面接で恩師が私の前で患者の特徴としての関係病理を

見事に引き出している、臨床家としての技の凄さです。それがあってこそ面接で子どもの対人的構えを生々しく捉えることができたのだと思います。

以上のようなことを考えた時、教育の場で学生たちに生に近い経験を積み重ねてもらうことの大切さとともに、彼らが対象（ここでは患者）にどのような関心を抱きながら、どこに着目して観察するか、それを教育する側の者はしっかりと捉えた上で、それにふさわしい助言や教育を行うことの大切さをより強く思うようになりました。

今から本題に入ります。感性を重視するようになったのは「関係をみる」臨床を積み重ねてきたことによりますが、「関係をみる」臨床は、従来の「個をみる」臨床とどのように異なるのかを考えてみましょう。

Ⅱ 「個をみる」ことと「関係をみる」ことの本質的な違い

「個をみる」ことと「関係をみる」ことの本質的な違いは、私が以前からコミュニケーションの二重構造として指摘したことと深く繋がっています。その二重構造を次頁の表1、表2に示します。

この二つの表において「情動コミュニケーション」の世界、「情動的価値判断」とされる現象には「感性」が深く関わっているからです。その意味からすれば「感性的コミュニケーション」と表現した方がよりお判りになるかもしれません。

この感性的コミュニケーションの世界で何が起きているかを、自ら体験的に実感を持って捉えることこそ、まさに「関係をみる」ことそのものなのです。

このような体験世界は、明確な言葉で表現することで容易にわかるようなものではなく、同様の体験を持つことによってはじめて実感できるようなものです。しかし、わかり合える時には、文字どおり「腑に落ちる」深い理解をもたらしてくれます。

いつも私は両者の違いを説明する時に苦労します。両者の違いを論じようとすると多くの困難にぶちあたります。感性的コミュニケーションの世界は私た

ち自身が日頃意識していない次元で起こっているものです。だから誰しも「感性」を真正面から取り上げることをためらってきたのだと思います。ただ唯一例外は「無意識」を発見し、精神分析という独自の精神療法を生み出したフロイトでした。彼は「言い間違い」といった日常の何気ない精神現象に着目し、そこに無意識の働きを発見したわけですが、「感性」を論じることは無意識あるいは前意識の世界と深く関係しています。無意識あるいは前意識の世界は、指摘されれば当事者自身も気づくことができるような性質のようですが、「感性的コミュニケーション」の世界はまさにそのような性質を持っています。

表1：コミュニケーションの二重性と知覚特性

| コミュニケーションの二重性 | 知覚特性 | 分化度 | 発達段階 |
|--|-------------------|-------|-----------------------------|
| 情動的（原初的）/ヴォーカル emotional(primitive)/vocal | 原初的知覚 | 未分化 | 乳幼児期早期に優位 発達障害では優位になりやすい |
| 言語的/非言語的 verbal/non-verbal | 視覚、聴覚を 中心とした五感 | 高度に分化 | 言語発達とともに優位になる |

表2：コミュニケーションの二重性、行動の価値判断、脳機能

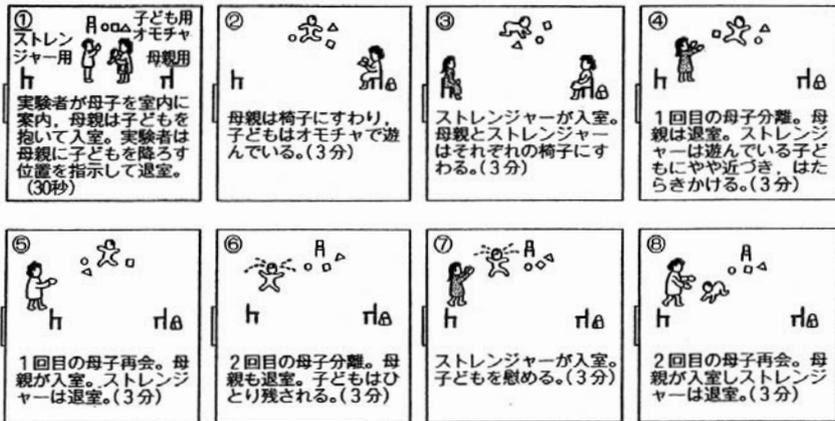
| 価値判断 | 意識水準 | 大脳の局在 | 反応速度 | 知覚の精度 |
|---------|-----------------------|---------------|------|-------|
| 情動的価値判断 | 意識が介在しない （無意識、前意識） | 扁桃体 （古皮質） | 速 | 粗 |
| 理性的価値判断 | 意識的 | 大脳皮質 （新皮質） | 遅 | 緻 |

Ⅲ 「関係をみる」臨床を体験的に理解するためにはどうすればよいか

私にとって「関係をみる」臨床で鍵を握るのは、＜患者-治療者＞の二者関係において、双方のこころの動きを感じ取ることです。しかし、「こころの動き」は、かたちもない、どこにあるかもわからない代物です。「情動の動き」といえば、多少なりともお判り頂けるかもしれませんが。もっと判りやすく言えば、「気持ちの動き」と言った方がよいかもしれません。

では私の主張する「関係をみる」臨床を多くの人に実感を持って理解しても

らうためにはどうすればよいかを考えた時、私に思い浮かんだのは、自分と同じような体験してもらえないということでした。そこで思いついたのが、MIUでの臨床研究で重要な素材となった新奇場面法（以下 SSP）（図1）²で観察した録画ビデオを供覧することで、母子関係そのものを観察し把握することを実際に体験してもらうことでした。そのような試みを私は今のところ「感性教育³」と称して、実践を積み重ねています。



IV 「感性教育」とはどのような試みか

1. 供覧事例

この試みの大きな目的は、乳幼児期の子どもと母親との交流を録画したビデオを供覧し、母子を観察しながら、そこで繰り返されている両者のこころの動きを捉えることを通して自らの感性を鍛えることです。そこで実際に用いた

² およそ1歳から2歳までの子どもを対象に、実験的に母子分離を行なうことで不安を惹起させ、その不安を母親との再会によってどのようにおさめようとするのか、そこで観察されたアタッチメント行動の特徴を検討するという心理学的実験の枠組み。

³ 拙著『臨床力を高めるための感性教育』（研究叢書 No.42）（西南学院大学学術研究所、2017、非売品）

教材は、アタッチメント研究で実施されている SSP を用いて母子交流場面を観察録画した記録ビデオです。

実際の感性教育ではいくつもの事例を供覧して対話を積み重ねますが、ここではそのなかから1つの事例（1歳0ヶ月男児⁴）のみを紹介します。

● 1歳0カ月 男児

主訴 泣いてばかりであやしても笑わない、抱きづらく抱くとのけぞる、視線が合わない、人見知りが激しく人を寄せつけない。

発達歴 仮死、吸引分娩。新生児期、授乳中のけぞったり母の手をふりはらう、視線が合わないなど母子間において子がしっとり甘えるといった関係が乏しかった。子はよく泣き、母乳を飲んだあとも泣き続けることが多かった。あやしても笑わない、抱いてもすぐにのけぞるので母は疲れやすかった。生後5ヶ月、指しゃぶりが始まる。指しゃぶりによって泣き叫ぶことが減った。子は、抱かれることを嫌がり、仰け反ってすぐに降りていた。そして、一人で横になって指しゃぶりをして寝てしまうことも少なくなかった。夜は30分から1時間おきに起きては激しく泣く。子どもの多い場所へ連れて行くと嫌がって泣く。真似をまったくくしようとしないう、人見知り激しく、周囲への警戒心が強い。初回面接で、母親は、「この子を赤ちゃんらしく感じたことがない」と語っているのが印象的である。

事例のまとめ 最初に母子二人で過ごしている時の子が母の働きかけに対して無視するように背を向けてボールテントのボールを手にして遊んでいるが、子は一人で楽しんでいるようには見えない。母に対して無視するような態度を取っているのは、「拗ねている」といってもよい態度である。ストレンジャー(ST)が入ってきた途端に、母は子に挨拶を促すが、子は応じる気配はない。なぜか母はそんな子の頭をさかんになでている。そのことが筆者に違和感を抱かせた。母が退室してSTと子の二人きりになると、子はSTを非常に意識し

⁴ 拙著『「関係」からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム』事例2、pp.55-59

ながらしばらく考え込むようにして動きが止まっていたが、STに気を遣うようにして自分の手を差し出してSTを自分の方に誘うような仕草を示す。それに呼応してSTが子に近づき、子が手で触っていた車のクラクションをSTが押して鳴らした途端に、子のそれまでの不安と緊張が一気に爆発するようにして表情に不安が走り、泣き始め、どんどん泣き方は激しくなっていく。STが抱きかかえて慰めようとするが、子は拒否するようにして身体をくねらせている。ずっと泣き続けていたが、母が戻ってきて、母に抱かれると途端にすんと泣き止むとともに、母と入れ替わりで部屋を出て行こうとするSTの後ろ姿をずっと目で追いつけている。母はさかんに子の頭をなでながらなだめているが、まもなく子はぐずり始めて身体をねじらせて抱かれるのを嫌がるようにして降りていく。すると自分一人で再び遊び始める。母がいなくなるのに気付くと、しばし様子をうかがいながら周囲の気配を感じ、次第に不安げな表情を浮かべて泣き始める。④の時よりも激しい泣き方になったので、すぐに母に入室してもらった。

母に対して甘えたいにもかかわらず、どこか「拗ねていて」自分から甘えようとしない。一人ぼっちになってもしばらくの間は心細さを感じながらも自分一人で周囲の様子を窺うようにしているが、この不安と緊張には耐えられず、ついに泣き始めている。それにもかかわらず、母との再会では抱かれはするが、そこにしばらく身をゆだねることはなく、むずかるように嫌がって降りてしまう。

母の前では自分の「甘え」という弱みを極力見せまいとする態度が顕著であるが、母はなぜ子の頭をさかんになでているのであろうか。そこに母の子に対する思いが強く反映していることが窺われる。なぜなら「撫でる」行動は子が何か母から見て褒めたくなるような親の期待に応える行動を取った時に行うものであるが、子はけっして褒めたくなるような行動を取っているわけではない。それでも母が思わずそうした行動を取っているということは、母の子に対する「こうあってほしい」という願いの強さの反映ではないかと思われる。普段の社会生活の中では他人様の前で母の期待するように振舞ってくれないということが母の主たる悩みであることを考えると、いかに母が子に自分の期待を掛け

ているかがわかるし、そうした期待に子も応えようとする一面がある。それはSTに対してなんとかして相手をしようと努めている④における子の振舞いに見て取ることができる。

子は母に対して「拗ねた」行動を取っているが、いざ母子分離になると、抑えていた不安に耐えきれなくなり、母を求める。しかし、いざ母と接する段になると、途端に回避的反応を示している。ここに事例の母子関係の特徴が端的に示されているように思われる。

2. 対象

これまで、主に学部生（社会福祉士を目指す学生）、大学院生（臨床心理士を目指す学生）、そして現場の臨床家（精神科医、小児科医、臨床心理士など）を対象に試みてきましたが、その際、重要なことは参加者の人数です。少なくとも3、4人、多くても6人程度、8人が限界といったところでしょうか。

この試みで大切なことは、参加者各自が観察して感じたことを自由に語り合い、訊ね合い、より深く理解し合うことです。だからどうしても参加者の人数は限定せざるをえなくなります。安心して、自由になんでも語り合えるという場を醸成することによって初めて、この試みは大きな成果をもたらすからです。

3. 対話を進めるにあたっての留意事項

この試みを実施する際、参加者には以下の諸点を十分に理解することを求めます。

- ①発表者は自分の感じたことを率直に述べるのが大切であって、けっして正しい答えを要求されているわけではないことを認識しておくこと。
- ②したがって、聴く側も発表者の発言内容をしっかりと受け止め、分かりにくいところがあれば、その点を訊ね合うことによって、発表者の意図するところをよりよく理解できるように努めること。
- ③全員の発表を聴いた後、相互の感想で異なったところを確認し合い、その相違がなぜ生じたのかを相互に比較しながら考えていくこと。
- ④以上の作業を通して、対象である母子双方のこころの動きをさらに深く理解

する可能性を発見し、確かめ合うこと。

4. 対話を進める際の進行役の果たす役割と目指すもの

この試みでもっとも大切なことは、客観的で正しい観察方法があるわけではなく、何をいかに観察するかという作業は、自分自身の対象への関心のあり方や価値観という自己の内面の特徴によって大きく左右されることを体感することです。このことによって自己理解が深まり、その結果として他者を観察し理解するための感性がより高まることが期待されるからです。

本試みが実り豊かなものになるか否かは、対象者に先の諸点の共通理解を図った上で、いかに参加者の内面を率直に引き出すことができるか、その話し合いの進め方にかかっています。よって進行役は極めて重要な役割を担っています。進行役の技量如何が成否を握っていると言っているでしょう。これまで私が担当してきました。

観察するビデオの内容は、乳幼児の母子交流ですが、それは話しことばのほとんどないコミュニケーションです。そのため、その観察の作業は、観察者自身の感性に委ねられる部分が多い。つまりはそこで体験される対人理解は自分の内面で感じたことを通した理解、つまりは自己理解という側面が強い。私が目標としたのは、参加者が各々自分で感じたことを率直に語り合い、そこで生じた相互の共通点あるいは相違点がなぜ生まれたのか、その背景要因を語り合う中で、他者理解がいかに自己理解と深く繋がっているかを体感することです。

よってこの試みは、参加者自身が他者理解を試みる中で、いかに自己理解が関係しているかということに気づき、それを通して自己発見（新たな自己への気づき）を体感することだということもできましょう。

5. 倫理的配慮

供覧する録画ビデオについては、母子ユニットで実際に臨床を実施した際に、両親に対して本録画データを研究と教育に用いることについて文書で同意を得たものです。

さらに、参加者にはビデオ供覧に際して、その内容の録画と録音をしないこと、ならびに患者に関する情報の守秘義務を遵守することを文書にて誓約してもらいます。

V 実際に感性教育を試みてわかったこと

1. 自由に発言して互いを認め合う体験の持つ意義

まず何よりも私自身が驚いたのは、先ほど述べた留意事項を心がけながら対話を進めていくと、参加者の多くが異口同音に、何でも言い合えて、自由に発言し、訊ね合い、互いの存在を認め合うということをこれまでの人生の中で体験したことがなかったという感想を述べていたことでした。

彼らがそれまでどのような思いを抱きながら学生生活を送ってきたのか、ここである学生（学部4年）の体験談を紹介しましょう。この学生は大学生活でも単位を取ることに苦勞して、本学の模範学生というより、あまり目立たない学生です。当初は見るからに卑屈な態度が目立っていました。しかし、1年間（学部の通年ゼミ）の感性教育を経験する中で、母子関係の観察において彼の発言は群を抜くほどに的確で、その反応に私自身も驚きを隠せませんでした。

「一年を通して変わった自分」C₁男（学部4年）

自分がこのゼミを通して特に感じたのは自分の思ったことをきちんと発言でき、それが否定されることがなく一人の意見として受け入れられ、議論を活発にできたことである。

実際の事例を見ながら私たちはいろいろな意見を出し合い、お互いの理解を深めていったが、今までそうした議論をしたことがなかった。今までは授業中当てられたらとにかく間違えないように、万人が納得する答えを用意するのに必死で、自分自身の意見を言えたかという、まず言えなかった。仮に意見を出したとしてそれが周りに認められず、変な印象を持たれたり、交友関係に差しわりがでたらどうしようということばかり考えていた。周りの目に気を配

るあまり、自分という「個」が押しつぶされてきたように感じる。

ゼミの議論でも上がっていたが、しばしば子どもの時から正しい答えを言わないとあたかも落伍者や仲間外れのように扱われ、その後の交友関係にも影響を与えてしまうことが多々ある。学校に入ってからには特に顕著で、間違った答えを言うことで周りから馬鹿にされたり、いじめの原因になったり、場合によっては教師から注意され、怒鳴られることもある。だから授業で発表の時は間違った答えを言わないように神経を集中し、周りの視線を極度に気にしてしまうあまりに、授業そのものが嫌になってしまうのではないかと考える。これを個人の問題として片付けるのは簡単だが、その結果、授業は正解しか言えない場になり、他の人の意見を聞いてお互いに研鑽することができず、そもそもの学び舎としての機能は損なわれているのではないだろうか。…（中略）…

子どもにとっての周りの目は親やそれに準ずる人になる。事例であったように親の機嫌を伺うように遊ぶ子ども、ストレンジャーに対してのみ遠慮がちに楽しく遊ぶ子ども、誰もいない間だけこっそり自分のしたい遊びをしようとして、親が戻ってきたらすぐに元いた場所で遊び始める子ども。私たちが学校で相手の目を気にして凡庸な意見しか言わないことよりも切迫している状況ではないだろうか。周りの目はつまり親の子に対する評価と同じようなものである。もしその評価が低かった場合、子どもにとっては唯一の拠り所から見放されたのも同然である。自分の今後がかかっているといえば、大げさな言い方にはなるが、それだけの必死さが見え隠れしているように感じられた。

事例をみて議論するうちに親に嫌われたり暴力を振るわれたりしないために、幼稚園にも通ってない段階でご機嫌伺いを行っていることに自分は衝撃を受けた。子どもがこういった行為に走るのはそうさせざるを得なかった親が悪いと自分はずっと考えていて、実際に議論の場ではそういった旨の発言もあったが、議論を重ねるうちに一概に親が悪いとも思えなくなった。今までならこういった議論をしている中で「君の意見が間違っている、正しくはこうあるべきだ」というふうに意見の押し付けをされて表面上では仕方なく納得しているふりをしてきたのだが、ゼミでの議論では自分の意見も尊重されたうえで「ではなんでこの母親が悪いのだろう」「この子どもの心境はほかにもあるのでは

ないか」といったように議論が展開し、その中で出た意見によって「なるほど」と納得して受け入れることができた。

このゼミを通して自分は他人の意見を食わず嫌いせず、きちんと聞いたうえで自分なりに咀嚼し、自分なりに納得できるように飲みこむことができたのではないだろうか。今まで条件反射的に否定され続けた自分の過去の中で、おそらくまっとうな議論をしたのは初めてだったように感じる。ゼミを通して学んだ他者との議論のあり方や意見の聞き方、正しい意味での意見のすり合わせをこの年齢になって初めて行うことができたのではないだろうか。

(コメント)

私が最初に感性教育を試みた時の学生でした。彼の体験談に私自身確かな手応えを感じ取ったのですが、それとともにある意味驚かされたのは、本学で多数派を占める一見育ちの良さを感じさせる女子学生の中に、C₁男さんのようには心の動きを感じ取ることが難しい人が少なくないことでした。そのことは、幼少期から親の期待に応えることに汲々として過ごしてきたことを推測させる学生が少なくないことをうかがわせます。

私は本学で学生相談も担当していますが、そこで出会う学生の多くが幼少期の親子関係のしがらみから逃れられず苦しんでいます。

このようなことを実感する中で、感性教育を大学で実施することは、専門知識を教授すること以上に大切なことだと強く思うようになっていきました。

2. 「関係をみる」ことはなぜ難しいか

「関係をみる」ことを目的とした感性教育を試みるようになって、多くのことがわかってきました。その中でもとりわけ重要な点は、なぜ誰にとっても「関係をみる」ことが困難なのか、その要因についてです。

「関係をみる」とはいえ、私が目指しているのは、幼少期の母子関係に困難をきたした事例の見立てです。そこにはすべての事例で、両者間にアンビヴァレンスという独特な情動の動きが蠢いているものです。それは、その気になれば、誰しも感じ取ることができるような性質のものだと最初は予測していたのですが、いざ多くの学生や臨床家に実施してみると、驚くほど困難であること

がわかってきました。それにはおよそ以下の要因が関係していました。

- ①正しいことを言わなければならないことに囚われる。
- ②行動次元の観察に囚われ、全体の流れを読み取ることができない。
- ③違和感をつい流してしまう—自分の情動の動きに向き合うことを回避する。
- ④捉えどころのない情動の動きへの戸惑いからより抽象的な言葉を使いたくなる。
- ⑤情動の動きを感じ取れないために次第に自らの論理的矛盾に突き当たる。
- ⑥自らの情動不安が賦活され、それに圧倒されて何も言えなくなる。

その詳細は新著『臨床家の感性を磨く』（誠信書房）に譲りますが、ここで私がとりわけ強調したいのは、ひとつには、情動の動きを感じ取るためには、細かな行動一つひとつにとらわれないで、両者間の心の動きに臨床家も身を委ねながら感じ取ることが大切だということです。言葉を換えて言えば、アクチュアリティとしての現実を把握することに留意せよということです。

ついでより重要だと思われるのは、アンビヴァレンスという情動の動きを感じ取ることは、臨床家自身の潜在化しているアンビヴァレンスを刺戟し、時に自分自身の過去の辛い「甘え」体験をも想起させることが少なくないことです。人によってはそれに圧倒されて、対象の母子間のアンビヴァレンスを感じているのか、それとも自分の過去の賦活化されたアンビヴァレンスを感じているのか、判別さえ困難な事態に陥ることさえあるからです。

さらには、アンビヴァレンスという不快な情動は誰にとっても掴み難い、言葉に形容し難い性質を帯びたものであるため、つい抽象的な用語で曖昧に過ぎてしまいやすいことです。

以下、学生の体験談を取り上げながら、感性教育の意義について考えていきますが、ここで紹介する学生の体験談は、『臨床家の感性を磨く』で取り上げていないものばかりです。したがって新著と併せて読んでいただければ、より一層理解も深まるのではないかと思います。

3. 子どもを中心に診療している臨床家に見られる特徴

「関係をみる」ことは、両者間に流れる情動の動き、ここでは特にアンビヴァレンスという独特な情動の有り様を感じ取ることです。このことは従来の臨床感覚を持った臨床家にとってすこぶる困難なことだということがとてもよくわかってきました。何回か臨床家を対象に感性教育（と言っても学生相手のように十分な時間をかけて対話を進めることは困難ですが）を試みてきました。その一端をここに示してみましよう。なお、参加者はすべて日常診療で子どもを中心に臨床を行っており、多くは子どもの心の診療医（などの専門資格）を標榜している方々です。臨床経験年数は数年から数十年と様々です。ここでは事例2の「母子関係の特徴をタイトルにして示してください」という課題に対する反応（タイトルのみ）を取り上げています。

小児科医1：「透明のカプセルの中の子ども」

小児科医2：「自己コントロール」

心理相談員：「この子はどこを見ているの？」

産婦人科医：「僕、お母さんに片思い」

小児科医3：「アンビヴァレンス」

小児科医4：「お母さんがいないとダメ」

大学院生：「同じものを見ようよ」

小児科医5：「一緒にいたい。遊びたいよ。お母さん」

小児科医6：「お母さん、一緒にいてね」

臨床心理士：「大人と子ども」

小児科医7：「ボール職人」

精神科医：「一緒に遊ぶってむずかしいね」

「透明のカプセルの中の子ども」という微妙な母子関係をなんとなく感じ取ったであろうことが推測されるタイトルもありますが、とても印象的で目立つのは、「僕、お母さんに片思い」「お母さんがいないとダメ」「同じものを見ようよ」「一緒にいたい。遊びたいよ。お母さん」「お母さん、一緒にいてね」

「一緒に遊ぶってむずかしいね」という子どもの気持ちを代弁しているかのようなタイトルが非常に多いことです。

私はこれらの反応を見て考えたのは、小児科医であれ、精神科医であれ、子どもを中心に診療している臨床家は子どもに対する思い入れがとても強いんだなということでした。そこには子どもへの強い愛情を感じ取ることができますし、それが臨床の仕事への情熱となり、強い動機付けとなっていることは確かだと思います。

しかし、正直言いますと、私はこの結果をみて強い危惧を抱きました。それは何かと言いますと、彼らは目の前の子どもの思いそのものを本当に肌で感じ取った上で、そのように表現したのだろうかという疑問です。

MIU で見てきた子どもたちすべてに指摘できることは、子どもたちの思いは「…である」というふうに言葉で明瞭に表現することのできるような性質のものではないということです。私はそこに子どもの母親への「甘え」をめぐるアンビヴァレンスを感じ取ったのですが、アンビヴァレンスとは、相反する感情や思いを示す実に微妙な情動（こころ）の動きです。つまりは「甘えたい」とも明瞭に言えないが、かと言って「甘えたくない」とも言えない、非常にもどかしい、なんとも言い難いものです。そのような繊細な情動のありようを生のかたちで感じ取ることが、私たち臨床家にはまず何より求められるのです。そうではなく、「…である」はずだという思い入れから接近するならば、母子双方を臨床家の望む方向へといつの間にか誘導することにつながりかねません。一見、子どもへの愛情を感じさせ、美しく響く言葉であるがゆえに、その危険性は大きいと思うのです。

VI 感性教育で学生はどのような気づきを得るか—自己理解の深まり

感性教育を行ってみて確かな手応えとして得られたのは、学生の多くが「関係をみる」こととそれにまつわる対話を積み重ねていくことによって、自分自身に対する深い洞察を体験していることです。その内容を検討すると、他者理解が自己理解と深く繋がっていることがよくわかります。

『臨床家の感性を磨く』では3名の学生による「不安・緊張時の自分の対処行動が浮き彫りになる」、「自分自身が自由になる体験」、「まるで自分がカウンセリングを受けたようだ」と題した体験談を取り上げています。教えられることの多い内容ですが、ここでは、私が新たに学びを得たいいくつかの学生の体験談を紹介します。

1. 子どもを理想化する傾向があることに気づいた学生

学生（A₉子さん）は臨床心理士を目指す大学院生で、真面目で努力家。幼子を育てながら社会人学生として勉学に励んでいる女性です。

事例2の供覧後、SSP場面②で子どもは母親に背を向けながら黙々とボールテントからボールを取り出し、後ろにいる母親を無視するかのようにして、母親のいない方にボールを放り投げています。私はそこに子どもの母親に対する屈折した「甘え」つまりは「拗ねている」ところを感じ取っていました。

A₉さんはこの母子関係の特徴として「なかなか目が合わない親子」と述べています。そして、その根拠として「…子どもはお母さんと遊びたくてボールを後ろに投げているけれど、お母さんは子どもがボールに興味を持って遊んで欲しいという遊び方をしていると感じたからである…」と記述していました。

そこで私は「お母さんと遊びたくてボールを後ろに投げている」と述べた内容について、子どもの気持ちをそのように明確に述べることができたのはなぜか、その根拠を訊ねていきました。（ここでは対話の詳細な過程については省略します。）

そのような対話の中からA₉さんは次のような気づきを得ることができたのです。以下取り上げるのは、全講義（毎週1回、計15回）の終了後に、私が学生に出した課題「前期の講義の体験を振り返り、自分が何を考え、どのような事に気づき、何を学んだか、タイトルをつけて、具体的に論じなさい」に対して提出されたものです。

「自分を理解する」A₀子（大学院1年）

講義の体験を振り返り、私は自分を知ることにつながる講義だったと考える。どんな自分を知ることができたかという、他者をみる時の捉え方と同時に自分の考え方、表現の仕方である。これは、SSPの観察とそこから感じたことを文章にする段階、そしてそれをみんなの前で表現して他の人と対話することによってわかった。次に、具体的にどのようなことで気づき学んだのかについて述べる。

他者をみる時の捉え方では、ありのままの事象から（離れてしまい実際の姿を）少し理想化して捉えているということがわかった。これは、SSPの事例において、子どもがボールを後ろに手当たり次第に転がしていた場面を、子どもの後ろにいた母親に向けたものと捉えて観察し、表現していたことから気づいた。それは、みんなと議論をした時に、他の人の「母親に向けて転がしたとは思っていなかった」という意見から気づかされた。このことから私は、拗ねている子どものありのままの事象を母親とやりとりしている事象に少し変えて捉えており、他者の捉え方が日頃もそうなのかもしれないということを考えさせられた。また、ありのままに捉えることの重要性を学んだ。

次に自分の考え方でも、他者をみる時の捉え方と同様に、自分自身の現実を受け止めてすぐに前向きに捉えていることがわかった。特に悲しみや怒りなど否定的な感情に対して起こりやすいことがわかった。これは、前述した他者をみる時の捉え方と同じような場面で気づきを得たが、それに加えて、先生から「自分の感情をいったん自分のなかで（飲み込んだ後に）前向きに捉え直して表現している」と言われたことから気づかされた。日頃の自分を振り返っても、自分自身で「あの人嫌い」「なんでああいう言い方をするのだろうという怒り」とかマイナスな気持ちを言いたくないと思っていた。また友達がこのようなことを言った時には、「意外とこういう面もあるんじゃないの」などマイナスではない見方を考えていた。自分のなかではこれまで無意識にこのような前向きに捉える作業を行っていたので、特別なこととは思ってもいなかったが、この講義を通して自分の思考の特徴であることがわかった。同時に、自分を守る対処法だったのではないかと感じた。なぜこのようなことに気づくことがで

きたのか考えてみると、他者の映像を見て感想を書くという課題だったからだと考えられる。自分をただ見つめるだけでは、このような理解にまでは深まっていかなかったと考えられるが、他者の映像を見て自分が感じたことを書く時には、他者に気持ちが向いていて、自分に対して無防備だったからだと考えられる。そのため、そこに自分のクセがはっきりと反映したのかもしれないと感じた。… (中略) …

この講義を通して、これまで無意識にしていたことを、自分の特徴やクセとして理解することが出来た。これらの特徴やクセに至った理由を考えると、すべて共通して繋がっていると考えられた。それは母親の影響である。母親は何でも先走って私に何かと言ってくる人だった。そのことが、私の(母親の言うことを良く聞く)素直でいい子には結びついたと思うが、何事に対しても根拠づけて考えることが少ないという自分の特徴とも関連していると考えられた。また悲しかったことや辛かったことを母親に話しても、「そんなことない」と前向きに言われ続けてきたことが、自分の思考にも影響しているのではないかと考えられた。母親の言動は、単純に私のつらい話を聞くのが面倒臭かったのかもしれない。しかし母親はそのように考えることで自分を鼓舞してやってきているのを知っているので、自分の娘にもそうした考えを無意識に言っていたのかもしれないとも考えられた。考え方や思考が自分の気づかぬうちに親から私へと世代間伝達していることを考えさせられた。

講義を通して、(意識的には) SSPの事例を観るなかで「他者を理解する」ように努めていたが、結果的にはこれまで気づかなかった自分自身の特徴やクセに気づいたことが自分のなかでは大きな学びであった。またそれを知ることで自分自身の過去について振り返って今の自分に繋がっている事柄を考える機会にもなった。この講義で学んだことが、今度は他者を理解するために活かされるように、自分の課題と向き合い、努めていきたいと考える。(傍点はすべて筆者による)

(コメント)

A₀ 子さん自身の気づきは私にとっても大きな学びでした。良い(望ましい)方に良い方に見ようとすることは奨励されることがあっても否定されることは

ないだろうとする考え方もあろうかと思いますが、彼女自身が気づいたように、それが（アクチュアリティとしての）現実を捉える観察眼を曇らせることにつながる危険性があることを見過ごしてはいけません。

しかし、A₀子さんの気づきそのものは、ある意味では親が子育てをする際に、ごく自然に生まれる心情でもあります。「はえば立て、立てば歩めの親心」というように、子育てにおいて「こうあってほしい」という願いが働くからこそ大変な育児にも喜びをもたらしてくれるものです。思春期の多感な時期に異性への恋心が芽生えれば、「あばたもえくぼ」ですから、時と場合によっては対象を理想化してみってしまうのは、自然なこころの変化ともいっていいでしょう。

しかし、臨床家として患者と相対する立場に置かれた時に、このような心理があまりにも強く働いてしまうと、目の前の患者の現実の姿をアクチュアルに捉える目を曇らせることになります。人間理解はまず現実の姿をありのままに捉えることから出発しなければならないからです。A₀子さんの気づきはまさにそのことを指摘してくれているように思われるのです。

2. 母子のアンビヴァレンスによって賦活された、言葉のない世界での恐怖体験—難聴のハンディを持つ学生の気づき

次に紹介するのは、もともと難聴というハンディを持って生まれた学生さんが感性教育のなかで自らの幼少期体験に対する深い自己洞察を得たことが語られている体験談です。

「アクチュアリティの世界が怖い理由」A₀子（大学院1年）

自分自身の「甘えなかったけれど甘えられなかった」という思い出したくなかったのに思い出さざるを得ない過去の想い、ビデオを見ていて感じる負の感情、アクチュアリティとは、リアリティとは何なのか、いろいろなものにさらされ、考え、濃密で苦しい、けれどあっという間に終わってしまって名残惜しい3日間だった。

（集中講義の）2日目の夜、テキスト『発達障碍の精神療法』理論編の「自

分自身のアンビヴァレンスが見えていなければいけない」という文を見て、今まで見ないように蓋をしてこんな私なんていないと思い込んでいた想いと、とうとう向き合わなければいけないのだ、(でも)嫌やだ・逃げたい、といった何とも言えないもやもやとしたものが確かな重さを持って胸にずしっとあるようだった。

1日目から子どもを見ながらその背後に小さい頃の私がずっとちらついていたが、それ(小さい頃のそんな自分)はないと無理やり打ち消していた。私は自分自身のアンビヴァレンスを避けていた。本能的にそれは苦しく恐ろしいものなのだと避けていたのだと気づかされた。私の甘えのアンビヴァレンスはアクチュアリティの世界に生きていた時のものが多い。事例10のビデオで声のトーンに頼らざるを得なかった時、アクチュアリティの世界に(足を)踏み入れざるを得なかった時、私は「怖かった」と3日目の朝、感想として述べた。怖く、恐ろしく、一種の絶望を感じて声をあげて泣きたくなったのは“自分自身のアンビヴァレンスが蠢いている世界”に入ることへの感情であったのではないかという考えに至った。それと同時にアクチュアリティとは違い、きっちり、はっきりとしたリアリティの世界に安らぎを求め、リアリティの世界へ頑なに固執していたことに気づかされた。

私がそう思い至った時、ベッドの中でネコと一緒に寝ていた。飼いネコを見て事例22を「飼い主とネコ」としたこと、事例の男児をネコと喩えた理由を思い出していくにつれて、私はネコという動物が好きなものもあるが、「自分の甘えを屈折した形で表現している生き物」に対して甘えたいのねと応えてあげる「私」という関係性が好きなんだと気づいた。それは今となってはもう叶わない「幼い頃の、抱いてほしい、注目してほしい私と、(それに)応える母」という関係を再現しているように見えて、私の中にはこんなにも甘えたいという気持ちと甘えのアンビヴァレンスがあったのだと気づき、泣いてしまった。同時にこんな自分がいたのだと気づけたのはこの講義の大きな、今後の人生に役立つ財産ともなる学びである。

(コメント)

私がこの学生の体験談でまず驚かされたのは、難聴のハンディを持ったゆえでしょうが、彼女にとっての幼少期の生々しい情動体験の想起です。供覧したビデオの事例（テキスト事例10）は、多動を主訴した2歳1ヶ月の男児でしたが、指示的な言動で子どもを動かそうとする母親に対して、なんとか応答しつつも、容易に母親には接近できず、遠くからサインめいた言動をさかんに行っていました。集中講義で供覧したビデオはかなりの数にのぼりましたが、その中でも、この事例は珍しく話し言葉の多いコミュニケーション場面が目立つ事例でした。しかし、録音された音声の明瞭度が低かったために、彼女にはノイズばかりが聞こえ、言葉を聞き取ることが難しかったのです。そのため、否が応でも彼女は母子間に流れている雰囲気をもより敏感に感じとらざるをえなかったのです。ある意味、それは自らの幼少期体験類似の状況の再現となったのです。そのため彼女に幼少期の情動体験を想起させることになったのでしょうか。それは彼女に当時の情動不安をも生々しく賦活させたのでしょうか。その時の心境を、彼女は「怖く、恐ろしく、一種の絶望を感じて、声をあげて泣きたくなった」と赤裸々に述べています。

彼女がこのような幼少期の生々しい情動体験記憶を自らの体験談として率直に言語化して述べていますが、私は彼女の勇氣ある行動に深い感動を覚えるとともに、臨床家になるための貴重な体験を得たのではないかとも思いました。

その証拠に、彼女は次のような深い洞察をも得ています。いま自分が可愛がっている猫を幼少期の自分に重ね合わせ、今となってはもう叶わない「幼い頃の、抱いてほしい、注目してほしい私と、(それに) 応える母」という関係を、猫と自分との間で再現している自らの行動を通して、「私の中にはこんなにも甘えたいという気持ちと甘えのアンビヴァレンスがあったのだと気づき、泣いてしまった」と語っています。彼女がこれほどまでに自らのアンビヴァレンスへの深い気づきを得たことこそ、私が感性教育で目指しているものです。私こそ彼女から多くのことを教えてもらった思いです。

Ⅶ 「関係をみる」ことを実感した瞬間—学生の体験談から

私は講義の最後に、「『関係をみる』ことは『個をみる』こととどのように異なるのか、タイトルをつけて自分の理解した範囲で述べなさい」という課題を出します。そこである学生が感動的な体験を報告してくれました。以下、原文のまま引用します。

なお、この体験談をよりよく理解していただくためには、次のような事例を学生たちは講義の中で観察し学んでいることを述べておかなければならないでしょう。

2歳1ヶ月（テキストの事例11） 男児

自閉症を疑われての受診。早速、SSPを実施して母子関係の様相を観察した。母親は懸命に子どもに遊びを促すが、子どもは母親を終始避けるようにして他の遊びを続けていた。3分後にストレンジャー（ST）が入ってきて、まもなく母親が退室した。すると、子どもは母親への態度とは対照的に、優しく相手をしてくれるSTに対して、控え目ながらも徐々に一緒に遊び始め、数分も経つと自分からSTの手を取って遊びに誘うまになった。その時である。母親が部屋に戻ってきた。それに気づいた子どもはすぐさまその手を引っ込めて、母親の方に笑顔を向け、小走りに駆け寄って行ったのである。

STと遊んでいるところを見られた男児は、母親に対する恐怖心から、まるで何事もなかったかのようにして母親の機嫌をとるように近寄って行ったのですが、まさに男児は母親に「媚びを売る」態度を示して、（他の人を好きになったら母親に嫌われるのではないかと母親に対する恐怖にもとづく）自分の不安を軽減しようと試みたのです。

「実際の“違和感”」D₇子（大学院1年）

「個をみる」ということは、リアリティに視点をおいたもので、表に現れて

いる物事、行動や現象、臨床での症状を中心とした見方であり、「関係をみる」ということは、アクチュアリティに視点をおいた、自分の内面に湧き起る情動の動きを通して、相手の情動の動きを感じ、こころのありようを理解することである。「個をみる」ことは「客観性」を伴っており、表にみえる“事物”の一部分を捉えているが、「関係をみる」ことは、その物事の中にある“動き”に身を置き、感じるというところに大きな違いがあると考えている。

これは余談になってしまうかもしれないが、集中講義終了直後の週末に、私は市外で病院実習を受けた。その日は、発達障害を抱えた子どもたちのデイケアの実習で、10名ほどの未就学児から中学生までの子どもたちが参加していた。そこで、4年生のひとりの男の子がとても気になった。その男の子は、ADHDと診断を受けており、デイケアで行われているプログラムの最中も、おしゃべりが止まらず、他者の話に割り込み、その話にまつわる自分もっている知識を早口でたくさん話していた。みんなで行った魚釣りゲームでは、自分が負けると苛立ちをあらわにして、邪魔をした友達を大きな声で責めたてながら、ドアを力強く蹴ったりしていた。その場に参加しながら、この男の子は、なぜこのような行動をとっているのかということを考えて。症状だけを見れば、ADHDだからこのような行動をとっても仕方がないと考えられると思うが、集中講義を受けたばかりの私は、関係性がとても気になった。なんとなく、悶々とした色んな疑問をもちながら、プログラムは終了し、子どもたちの親が迎えにやってきた。何気なく、その男の子に目を向けると、迎えに来たお父さんに近寄る男の子の姿があった。私は、その瞬間に、男の子とお父さんの間に流れる“違和感”を感じた。「先生がお話になっていたことはこのことか！」と、からだに衝撃が走るような感じがした。その“違和感”を表現する明確な言葉が浮かんでこないが、男の子がお父さんを見た瞬間に、急に穏やかな、プログラム中には見られなかった表情になったのである。一見すると、お父さんに会えた喜びが現れているようにも見えるが、不自然な微笑みに見えてしかたなかった。お昼休みに、指導担当の先生と話をしたとき、その男の子のお父さんは学校の先生で、しつけもとても厳しく、ときには手をあげることもあるということが分かった。それが分かったとき、あのときに感じた“違和感”は、男

の子の父親に対する怯えや、そこから生まれる抑圧された苦しい感情が感じられたのかもしれないと思った。最後に、臨床心理士の先生が「この男の子には、ここでは家でも適応できるエネルギーを養ってもらいたい」と言われた。その言葉に、なんともいえないせつなさともどかしさを感じた。

(コメント)

この学生の体験談を読むと、彼女は明確に「関係をみる」ということの重要なポイントを掴んでいることがわかります。ADHDの診断名という色眼鏡で男児の行動を意味づける誘惑に駆られながらも、場の流れ(文脈)を読み取りつつ、父親との再会場面での子どもの豹変ぶりに、彼女は「子どもが父親に媚びている」態度を見て取っています。

私が感性教育で求めているのはまさにこのような学生の感性でしたので、この報告を読んだ時には感激したものです。

じつは、この学生は最初からこのような感性を示しているわけではありませんでした。それどころか、ある意味「個をみる」ことに自信さえ持っていた学生です。だからこそ今回の感性教育は彼女を大きく揺さぶるものがあったのです。

最初に供覧した事例(事例2)での彼女の自分への気づきを伴った衝撃的な体験が以下述べられていますので、紹介します。

「認めたくない事実」D₇子(大学院1年)

講義の冒頭で、小林先生が話されたことは、「臨床において大切なことは“個”をみるのではなく“関係をみる”ということ。私のノートの中にもしっかりとメモとして残してある記述である。しかし、この事例で私がみていたものは、幼児の“行動”のみに視点を置いたものであった。「指しゃぶり」「泣き顔」「手の動き」など、このような幼児の様子、つまり、“個”をみていたのである。

この事例について、私は「指しゃぶりによる分離不安の解消」をタイトルにした母子関係の特徴を講義の中で発表した。その時の自分の気持ちは、ハッキリとした確信に満ちたものであった。しかし、先生から、「子どもはなぜ、指

しゃぶりをするのか？不安を解消するものだとしたら、なぜこの子どもは、母親に抱っこされながら指しゃぶりをしているのか？」と問われた時、私の心の奥がざわつき始めたのを覚えている。母親と子どもの“関係”をみることできていなかったという事実と同時に、映像の中にある母親から抱っこされても安心できない幼児を受け入れなくなかったのである。心がざわついたまま、「この子どもは母親から安心感を得ている」という考えを疑い始めてもいたが、そうではないと言い聞かせながら、自分の偽りの意見を押し通そうとしていた。そのざわつきは、意見を述べながら、少しずつ、少しずつ、心の中心に集まり始め、重く自分を苦しめるようなものになっていった。「これは何なんだろう？」とその時は、この苦しみの意味が分からなかった。

講義が終了し、私は車に乗って子どもたちを迎えに保育園に向かっていた。車を運転しながら、講義を受講中に感じたことを振り返っていた。その時、ハッと気付いた。それは、母親は子どもを安心させられる存在であるということ。自分で思い込んでいたこと、である。つまり、その考えの奥にあるのは、自分の母親は優しくいつでも自分に安心感を与えてくれる存在だと思い込んでいたことではないかと感じた。

私が4、5歳の時だったと思うが、母親は外出しなければいけない大事な用事があったようで、私と一緒に来るように言ったが、私は家で遊んでいたいと駄々をこねた。押し問答になった末、2歳離れた弟だけを連れて私を一人家に残して出かけたことがあった。まさか私だけを置いていくとは思ってもよらなかったが、母親は外に出て行った。急に淋しくなった私は母親を追いかけようと家の窓越しに「お母さん！」と叫んだが、すでに車の姿はなく、とてつもない悲しみと恐怖を感じたことがあった。

その記憶はしばらく忘れていたが、私が子育てをするようになってしばらく経った時に、ふと思い出したエピソードだった。

今考えると、自分の子育てを通して、自分の中で認めてはいけないと蓋をしていたものが開いて、本当は認めて欲しかった部分が現れたのかもしれないということ、つまり、この講義で体験したことから、わが子を通して、幼い頃の自分自身を感じていたのかもしれないということを理解できた。またそれと同

時に、そのエピソードは、母親の期待に添うように頑張っていることの始まりだったのかもしれないということも感じ始めている。この文章をまとめながら、私の目に涙が溢れ出した。その涙の奥には、せつなさ、葛藤、淋しさ、恐怖など様々な感情が入り混じっていた。この事例は、私に大きな一歩を踏み出す機会を与えてくれたように感じた。

(コメント)

この大学院生は子育てをしながら学んでいる社会人学生ですが、対話の中で自分自身の内面の動揺やその後の変化がとても率直かつ的確に語られていて、心を打つものがあります。

この事例の母子関係の特徴を捉えて発表した時、彼女はとても自信があったといいます。語られた内容は彼女の気づきからもわかるように、子どもの行動特徴を的確に捉えてはいますが、それは「個をみる」という視点から捉えたものです。そこで私は彼女のタイトル「指しゃぶりによる分離不安の解消」のみでなく、母親に抱かれていることにも注意を向けるように促して、母親に抱かれていることがこの子にとってどのような体験となっているのかを考えてもらうように、私は問いを投げかけました。それが契機となって、彼女の自信が揺らぐとともに、その不安は何から来ているのかを考えるようになっていきます。

彼女がその不安の起源に気づいたのが、自分の子どもを迎えに行った道中であつたというのは、とても感動的であります。母親としての自分を常に意識することの多い女性だったからこそこのような気づきが生まれたのかもしれない。

この大学院生の体験談から、「映像の中にある母親から抱っこされても安心できない幼児を受け入れたくなかつた」思いによって、この母子関係に流れているアンビヴァレントな情動の動きを感じる事が困難となり、結果的に彼女は子どもの「指しゃぶり」という行動に注意が引き付けられ、この母子関係の特徴を「指しゃぶりによる分離不安の解消」というタイトルで述べたことがわかります。

Ⅷ むすびに代えて—感性教育で目指すものは精神療法に通じる

私が感性を磨く必要性を臨床家に語りかけるのは、私の考える精神療法の核心が感性つまりは「感じ取る」とことと密接に繋がっているからです。

私はこころの病の起源を、乳児が養育者との間で体験する「甘え」のアンビヴァレンス（「甘えたくても甘えられない」という心性）に求めて探究してきました。このアンビヴァレンスという根源的不安に対して、乳幼児は様々な対処を試みて不安を軽減しようとします。これらの対処行動がこれまで精神医学で取り上げられてきた症状の成り立ちであることを考えると、こころの病の根治療法で焦点を当てるべきは症状ではなくアンビヴァレンスということになります。アンビヴァレンスに焦点を当てることによって、患者の潜在的な「甘え」を相手（臨床家）に出しても大丈夫だという体験を得ることができるようになっていく。そのためには症状の前景化によって背景に退き、捉えがたくなっているアンビヴァレンスを面接で取り上げ、患者に潜在的な（意識下の）「甘え」に気づいてもらうことが肝要です。そこで臨床家が患者自身のアンビヴァレンスという情動の動きを捉えることができるようになるためには、どうしてもアンビヴァレンスを「感じ取る」感性を磨くことが必要だということに気づいたのです。

そのような動機から開始した感性教育でしたが、実際に試みる中でわかってきたのは、患者のみならずわれわれ自身も彼らと同様、様々な対処法によってアンビヴァレンスそのものに直接向き合うことを回避して生きていることでした。それはなぜかといえば、乳児期の「甘え」のアンビヴァレンスは大なり小なり誰もが体験してはいるのですが、不快で捉えがたい情動でもあるからです。

しかし、ここで大切なことは、臨床家は自らのアンビヴァレンスとその対処のあり方に気づくことによって、初めて患者のアンビヴァレンスを肌で感じ取ることができるということです。他者（患者）のアンビヴァレンスを捉え治療的に扱うことができるためには、どうしても臨床家は自己理解を深めていくことが求められるのです。

感性教育で学生の多くが自らの幼少期の体験を想起しながら自己洞察を深め

ています。その点からすれば、感性教育で目指すものは（私の考える）精神療法に通じるということができるのです。

本稿は西南学院講座 in Tokyo「アクティヴ・ラーニングの目指すもの―「深い学び」と「感性を磨く」臨床と哲学のあいだPart 4」(2017年11月3日、千代田区、サビアホール)での講演「臨床家の感性を磨く」を改題したものである。

参考文献

- 小林隆児 (2014)。「関係」からみる乳幼児期の自閉症スペクトラム。ミネルヴァ書房。
- 小林隆児 (2015)。あまのじゃくと精神療法。弘文堂。
- 小林隆児 (2016)。発達障碍の精神療法。創元社。
- 小林隆児 (2017)。臨床力を高めるための感性教育。西南学院大学学術研究所 (研究叢書 No.42)、非売品。
- 小林隆児 (2017)。自閉症スペクトラムの症状を「関係」から読み解く。ミネルヴァ書房。
- 小林隆児 (2017)。臨床家の感性を磨く。誠信書房。

